

名家俳句集

全

昭和五年三月十日 印刷
昭和五年三月十三日 發行

有朋堂文庫
名家俳句集
(非賣品)

編輯者

塚 本 哲 三

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地

印刷者兼
發行所

三 浦 捷 一

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷所

有 朋 堂 印 刷 所

東京市神田區錦町三丁目九番地

發行所

有 朋 堂 書 店

東京市神田區錦町一丁目十九番地



緒言

一 本書收むる所の諸家の句集について解題すること左の如し。

梅翁宗因發句集 一陽井素外の編集にて、天明元年の印行なり。(之に拾遺後拾遺後々拾遺を加へて文化二年刊行せしもの、博文館の俳諧文庫中に收めたれど、原本を得ざりしを以て採らず) 宗因の句集は此他に寛政十二年浪花一炊庵の序文ある宗因俳諧發句集あれど、句數百餘に過ぎず。宗因の傳記は素外の序文に見ゆれば改めて贅せざるべし。其句はなほ縁語掛詞の滑稽を脱せざれど、貞徳派の陳腐幼稚なる駄洒落と異なりて、才氣煥發、輕俊にして詩趣あり、談林の開山たるに恥ぢずといふべし。

西鶴句集 西鶴は宗因門下の驍將なれども、其句の傳はるもの多からず、諸種の句集短冊等より拾集して、漸く七八十句を得たり。而して其句の俊秀なるもの亦少し。附合に新奇を弄する手腕はともかく、發句は其長技にあらざるが如し。句集印刷後發見したるものを次に掲げて遺漏を補ふ。

黄昏や藤女首筋黒くとも

歌人の人麿詩人の東坡是は名木とて譽めてしまはれし跡を今の世の俳諧師がとかう申すもあるかなり

香の風や古人かしく梅の花
星の林明日見るまでの櫻かな
蟬聞て夫婦いさかひはつる哉
蓮の實を袖に疑ふ霞かな
父は花酒の母なり今日の月

(句集に母を花に誤りたれば改めて出す)

里人は突白かやす花野かな
山茶花を旅人に見する伏見哉
丸頭巾ひだのながめや位山
冬籠長寝呵らぬ人となり
世に住まば聞と師走の砧哉

十萬堂來山句集 俳諧五子稿(安永四年刊)中の一篇なり。來山は小西氏、別に湛々翁、卜萬

堂等の號あり、談林派の前川山平に従うて學ぶ。其句談諺の中に蕭散の氣ありて、談林と蕉風とを融和せし趣あり。享保元年十月三日歿す、年六十三。來山の句集は別に今宮草、續今宮草あり。

鬼貫句選 不夜菴太祇の編にて二冊五卷に分ち、卷の五に其紀行文を收む。鬼貫は伊丹の人、姓は上島、囉々哩、犬居士、佛兄等の別號あり。はじめ宗因の風調を慕ひしが、壯年まことの外に俳諧なしと悟りて、詞藻作意に汲々たるを陋とし、平淡率易なる句風を好む。其弊はやゝもすれば淡泊無味に陥るにあり。來山と鬼貫とは蕉風隆興時代に於て別に一旗幟を樹てし關西の二雄にして、俱に談林よりいでて一隻眼を開きしものなり。元文三年八月二日歿す、享年七十八。大悟物狂、七車等の句集あり、併せ見るべし。

芭蕉翁發句集 芭蕉の句集は其類多けれど、本書は句數多きに過ぎず少きに失せず、中庸を得たるに近し。五升菴蝶夢の編なり。

山口素堂句集 これも五子稿中のものなり。四季の末に附したる追加は、新に余が増補に係

る。素堂名は信章、甲斐巨摩郡山口の人、江戸に遊び林春齋について經學を受け、又京都に遊歴して北村季吟を師とし俳諧に遊ぶ。芭蕉はもと同門の友たれば、その東下以後日々往來、唱和を絶たず、天和の頃漢詩直譯風の新調を創めて、隱然一方の俳宗たりき。享保二年八月十五日七十五歳にて歿せり。

其角發句集 坎窩久臧の考訂にて、小本二冊に五元集の句を四季に分ち收め、詞書の如き往往節約に従へり。

立峰集 百萬坊旨原の編にて、後に嵐雪句集と改題せり。四季の末に附したる追加は余の増補なり。其角の瑰奇放逸と嵐雪の平弱溫雅と併せ見て、その人物性行を窺ひ知るべし。

丈草發句集 編者詳ならず、蓋し京都の俳諧書肆井筒屋などの集めしものか。

惟然坊句集 三河荊谷の士中島秋舉の編にて、文章逸話を附載す。此書文化九年版と、其後の再版と二種あり。再版本は穴戸方鼎の跋文を除き去り、追加の句二十餘を添へたり。而して其中に芭蕉の句二三句を混ぜり、芭蕉の一名風羅坊を惟然の事と思ひ誤りしにや。こ

こには右の二版を撮合し、再追加として新に増補を加へたり。

去來發句集 此書の由來は蝶夢の序文に詳しければ言はず、附録は新に添へしもの。

以上はいづれも芭蕉門下の名家、おのゝ特得の風調ありといへども、之に據りて元祿俳壇の傾向を知るに餘師あるべし。

蕪村句集 門人几董の編む所にて、原本題簽に前編とあり。蕪村の句はもとより是に悉きたるにあらねど、水落露石氏の蕪村遺稿、秋聲會の句集拾遺など、世に汎ければ重ねて採録せず。

太祇句選 俳友嘯山雅因二人の選ぶ所、後編は門人五雲坊必化が編なり。太祇は炭氏、江戸の産にして慶紀逸の門人なり。中年京に上り島原に住み、明和八年八月九日歿す、享年六十三。蕪村が漢語雅言を驅使して古典的景情を描くに反し、太祇は平談俗語を以て眼前の人事を寫すに長ぜり。想ふに紀逸門下にありて、雜俳の趣味に薰染せられしも其一因たるべし。

樗庵麥水發句集 何人の撰なるを知らず、寫本にて傳はれり。麥水は加賀金澤の人、堀氏、名は樗庵、將碁を善くし、藩主前田泰雲公のために五人扶持醫者格を以て、其師範を命ぜらる。幼より俳諧を好み、初め美濃の支考を仰ぎ、中比伊勢の麥林に依り、終に麥水の號あり。其後美濃伊勢の風調卑野にして蕉翁の意に隔ること遠きを悟り、虛栗の調を喜び新虛栗の著あり。几董が「明鴉」の序に、蕪村の言を引きて、「今や不易の正風に眼を開るの時至れるならんかし、既に尾張は五歌仙に冬の日の光を挑まんとす。神風や伊勢の翁ともてはやせし麥林の一格も、今は其地にして信ぜざるの徒多し。加賀州中に天和延寶の調に髣髴たる一派あり、平安浪華のあひだにも、まことの蕉風に志す者少からず」といへる、加賀州中の一派は麥水實に其唱首たり。句集には麥林調のもの多數を占むれども、虛栗調も亦乏しからず。麥水また文才ありて、慶長中外傳、慶安太平記、南島變等の稗史を著せり。天明三年十月十四日歿、享年六十六。(或云六十三)

麥水句集拾遺 諸書を搜りて獲たるもの百三十餘句を收む。肖像と筆蹟とは、麥水七回忌の

追善集「落葉招」に載する所のものなり。

無腸句集 無腸は文壇の奇才上田秋成の一號なり、俳諧は少年の頃几董の父几圭の指導をうけたり。「若い時は人まねして俳諧といふ事を面白くたふとがりしが、歌よみ習ひてのちも時々云て樂む也」とみづからいへる如く、中年以後多く作らざりしにや、傳はるもの極めて少きも、其佳句に富めるは、往くとして可ならざるなき斯翁の才を見るべきなり。文化六年六月二十七日歿、享年七十六。

井華集 蕪村の高足高井几董が自選の句集なり。几董は京の人、通稱小八郎、春夜樓、春秋庵、晉明の號あり、蕪村歿後三世夜半亭となり、剃髮して詐善居士と稱す。父の几圭は早野巴人の門人にて、師の蕪村と同門なり。寛政元年十月二十二日歿、享年四十九。

春泥發句集 召波も亦京の人、蕪村門の俊足たり。姓は黒柳氏、春泥舎と號す、明和八年十二月歿す。句集は其子維駒の編する所なり。

蘆陰句選 蕪村が我門の錐囊なりと推稱せし大魯は吉分氏、阿藩の士、公務の餘暇風流の志

深く、晩年に及び致仕して京師に住し、後大坂に遷る。初め馬南と稱し、後蘆陰舎と號す、大坂より更に兵庫に轉するに及び三遷舎と稱せり。安永七年十一月十三日蕪村に先だつこと五年にて歿す。其句太祇の迂餘曲折を好み、几董召波の細心鏤刻を事とするに反して、一氣呵成直截明快、恰も白雨巨杉に濺ぐが如し。

俳懺梅 大江丸自選の句集にて、所々に新古の俳話を交ふ。大江丸は大坂の人、飛脚問屋島屋の主、氏は大伴名は政胤、回心齋、大江隣の號あり。初め活井舊室に従ひ芥室と呼び、又舊國と稱す。師友頗る汎く、就中蓼太の感化多し。其句市井の氣に富み滑稽を喜ぶ。只その何となく油氣多くさらりとせざるは、鯛屋貞柳の狂歌と一般、大坂趣味のおのづからなる所なるべし。文化二年三月十八日歿、年八十八。

一茶發句集 一茶は小林氏、通稱彌太郎、俳諧寺、蘇生坊の號あり。信州柏原の産、幼時繼母の虐待に堪へず、家を脱して江戸に出で、素丸、成美等に從て俳諧を學び、巧に俚語を操りて飄逸洒落なる句を創始す。五十二歲郷里に歸り始めて妻を迎へて家を成し、文政十

年十一月十九日寒酸なる生涯を終る、年六十五。

俳諧玉藻集 蕪村の編輯に成る女流句集なり。智月、園女等を除きては、佳句に乏しと雖も、婦人の柔情幽思、おのづから男子の想ひ到らざる所なきに非ず。

- 一 本集校訂に方り假名遣を一定し、漢字を充てたる外、すべて原本に従ひ私意を加へず、送假名不足のため兩様に讀まるゝものの如きは、皆本のまゝにして讀者の判斷に委せり。
- 一 頭註は故事憑據を示すを主とし、詞意の近似せるものを舉げて對照比較に使ぜり。
- 一 本集の材料は水落露石氏の藏架中に獲る所多し、附記して謝意を表す。

大正三年九月二日

校訂者 藤 井 紫 影

名家俳句集目錄

梅翁宗因發句集

一一三〇

春之部 三

夏之部 七

秋之部 二

冬之部 一六

梅翁系傳 一九

梅翁發句追加 二三

西鶴句集

三一—六

春 三

夏 三

秋 三

冬 三

十萬堂來山句集

三七—五〇

雜 三六

春 三七

夏 四一

秋 四四

冬 四七

鬼貫句選

五一—九六

卷之一

春 五三

卷之二

夏 六一

卷之三

秋 六七

卷之四

冬 七七

卷之五

禁足旅記……………八三

芭蕉翁發句集

九七—一五六

上

春……………九九

夏……………一二

下

秋……………一二七

冬……………一四五

雜……………一五六

山口素堂句集

一五七—一七〇

春……………一五七

追加……………一五九

夏……………一六〇

追加……………一六三

其角發句集

一七一—二七〇

上

春之部……………一七三

夏之部……………一九七

下

秋之部……………二二三

冬之部……………二五〇

雜之部……………二七〇

玄峰集

二七一—三二四

春之部……………二七三

追加……………二八〇

夏之部 二八二

追加 二九四

秋之部 二九五

追加 三〇八

冬之部 三〇九

追加 三一四

丈草發句集

三二五—三三四

春 三二七

夏 三三一

秋 三三五

冬 三二九

追加 三三四

惟然坊句集

三三五—三六四

春 三三七

夏 三四〇

秋 三四二

冬 三四五

雜文逸話 三四七

追加 三五七

再追加 三六〇

去來發句集

三六五—三八八

春 三六九

夏 三七三

秋 三七七

冬 三八三

附錄 三八六

蕪村句集

三八九—四四〇

卷之上

春之部 三九一

夏之部 四〇三

卷之下

秋之部

冬之部

太祇句選

春

夏

秋

冬

太祇句選後篇

春

夏

秋

冬

檣庵麥水發句集

春の部

夏の部

秋の部

冬の部

追加

麥水句集拾遺

春

夏

秋

冬

無腸句集

春

夏

秋

冬